

東南アジア数学教育会議に出席して

学校教育学部 山口 清

1990年6月14日～17日にブルネイ・ダルサラーム国での第5回東南アジア数学教育会議(SEACME 5)に出席した。会場は首都Bandar Seri BegawanにあるBrunei Darussalam大学であった。数学教育に関する国際会議は最も大きなものは4年に一回開催される国際数学教育会議(ICME)であろう。これは1992年夏にカナダ・モントリオールで開催されることになっている。その他に地域的なものがあり、筆者が出席したのは東南アジアの各地で開催される会であった。この会に出席して会そのものとともに、ごく一部ではあるが、東南アジアの社会・文化について理解することの大切さを感じた。

日本からブルネイへの直行便はないので、大阪からシンガポールへ行き、一泊した。シンガポールは小国であるけれども、極めて活気に満ちた国のように思われた。翌朝、再出発して2時間くらいでバンドル・スリ・ベガワンに着いた。

ブルネイ・ダルサラーム この国は現在、ASEANの一員であるが、新聞紙上に登場することはそれほどはない。しかし、石油の産出国であり、天然ガスは日本へ大量に輸出されている。この国の歴史は古く、600年代には既に存在していたようで、ボルネオ国王をスルタンに頂く君主国である。英語・マレーシア語の新聞Borneo Bulletinの紙名から想像されるように「ボルネオ」は「ブルネイ」から来たもののように、その歴史の古さがうかがわれる。東南アジア島しょ部に属するブルネイは自然において熱帯性気候、ボルネオ島で南シナ海に面している。中国またマレーシアに対する位置関係から、独自の文化とと

もに中国および西方のインド、イスラム文化の影響を受けている。また、政治的には長い間、植民地政策のもとで生きてきた。この国は小国であるが、石油産業はこの国をきわめて豊かな国にしている。これらが、ブルネイの人々の文化・生活の基盤の一つをなしている。首都のバンドル・スリ・ベガワンはブルネイ河に面しており、それほど大きくない街の中で、みごとなオマール・アリ・サイフディン・モスクが見られる。モスクといえはるか西方の中近東を連想するので、これは意外な感じであった。ブルネイ河には水上に建てられた家の集落があり、その中には学校さえもがあった(下の写真)。



ブルネイ河上の学校(カンボンアイエル)

SEACME 5 会議の開会式は朝8時30分から始まった。まず、会場左手に座った人がコーランの一節を唱える。ついで、学長、文部大臣のあいさつがあって、開会式は済んだ。この度の会議には文部省も大いに力を入れているように感じられた。また、多くの現場教師の参加があって、にぎやかであった。この機会に現場の教師にも数学・数学教育の研究に関心をもつようにと試みているようであっ

た。下元豊, もっと知りたいブルネイ (1986), 弘文堂, に述べてあるように, かつては植民地政策のために十分な教育制度・設備がなかったようであり, 授業での言語など複合民族国家としての複雑さもあったようである。この国はもともとマレーシアと密接な関係をもっているが, ブルネイが小国であり, これからいかにして発展するかを考えたとき, シンガポールのような工業に力点を置いた教育が充実した国をめざしているように思われる。その意味ではシンガポールと共通点が多くあり, 両国を結ぶ航空路線も多く, 貨幣はお互いに共通に通用する。教育立国のために1985年4月にボルキア国王が大学創設を提唱され, 同年に大学が創立された。現在の学部構成は, 教育学部, マネージメントおよびアドミニストレーション研究学部, 理学部, 芸術・社会科学学部の4学部から成っている。ある会議参加者と話をしたら小さな大学でと謙そんしておられたが, 附属図書館で新着数学雑誌の棚を見せてもらったところ, きわめて充実したものであって, 数学研究上に何も困ることはないと思った。ただ, 日本の大学の紀要などはあまり見かけないようだったので交流を活発化する必要がある。(下は会場)



第5回東南アジア数学教育会議(ブルネイ大学)

既に東南アジアでいくつかの数学会があるが, ここでも最近ブルネイ・ダルサラーム数学会が創設された。数学研究者が少ないためか, 学生でも会員になれるようになっている。このことはブルネイ自身の数学レベルを向上させるために有効で賢明な選択であろう。

算数・数学がマレーシア語と英語のいずれで指導されているのか良く解からないが, 街でもとめた算数のテキストは英語でかかれていたので, 少なくとも英語を用いた授業もなされているのであろう。これはブルネイがシンガポールと同様な道を歩もうとしていると思われることを考えると理解できることである。

会議のテーマは“数学の魅力”であり, 会議の目的を数学教育そのものの研究会というよりもいかに数学の美しさを理解するかに重点をおいている。

会期中, 2回ディナー・パーティがあった。この時もコーランを唱えて, 食事が始まる。席は男女がそれぞれ別になっていた。2回目のお別れパーティではカレッジの学生による劇があった。内容はお見合いから結婚するまでの文化的ショーであったが, 花嫁の待つ新居に到着した新郎の一行は家の前でゆっくりとまわり始める。隣の席の当地の先生が筆者に three times と言って下さった。なるほど, 以前に雑誌「図書」に出ていた熊本県の地方で花嫁が馬に乗って家を出るとき, 家のまわりを3回まわるといふ慣習があるとの記事があったことを思い出した。これらは関係があるのだろうか。東アジアの国々は古代から密接に関係していたのだろうか。

文部大臣はよく会に出席され, 閉会式にも無理して出席されたらしく, この会議を大学とともに重視しておられるようであった。東南アジアの現実に触れ, 我々はもっとこれらの国々と学術交流をして, 理解を深めなければならないと思った。

会議に出席した日本からの方々は約5名であった。全員が研究発表をしたのだから効率は良いかも知れないが, あまりにも少ない。もっと日本の研究者がこのような会に出席して, 東南アジアの人々の心に触れ, 国際交流を深めたいものである。次の東南アジア数学教育会議はインドネシアで開催される予定である。

■本文で, ブルネイ大学案内“PROSPECTUS 1989-90”を参照しました。